# 第２回北海道教育推進会議高等学校専門部会
# 審議のまとめ［概要］

北海道教育庁新しい高校づくり推進室

日　時　平成29年２月20日（月）13:30～17:00
会　場　北海道札幌工業高等学校

| | | |
|---|---|---|
| 出席者 | 部会長（石狩市教育委員会教育長） | 鎌　田　英　暢 |
| | 副部会長（北海道大学大学院教育学研究院准教授） | 篠　原　岳　司 |
| | 委員（新ひだか町立静内中学校長） | 青　柳　荘　平 |
| | 委員（美深町教育委員会教育長） | 石　田　政　充 |
| | 委員（株式会社井上技研専務取締役） | 犬　嶋　ユカリ |
| | 委員（寿都町立寿都小学校ＰＴＡ会長） | 蝦　名　竜　次 |
| | 委員（上ノ国町長） | 工　藤　　昇 |
| | 委員（北海道千歳リハビリテーション学院顧問） | 佐　藤　博　明 |
| | 委員（株式会社札幌振興公社代表取締役社長） | 星　野　尚　夫 |
| | 委員（北海道ＰＴＡ連合会副会長） | 森　　政　徒 |
| | 委員（北海高等学校長） | 山　崎　省　一 |
| | 委員（北海道札幌北陵高等学校ＰＴＡ会長） | 山　本　美　加 |
| | 委員（札幌市立山の手小学校長） | 山　谷　陽　子 |

（敬称略）

主な意見等

## ２　高校教育全般について

【高校の配置について】

○　現在の高校配置計画は、学区毎に３年間を見通した計画を示しているが、例えば、高校別に具体的な見通しを示すような大胆な計画を出し､学校毎に地域の意見を聞くなどして、学校の存在意義を問うことも必要ではないか。

○　職業学科の高校については、地域の産業などを踏まえて配置することが大切であるが、子どもたちが、自分の特性を生かすことができるよう、どこの管内にも職業学科高校を配置した方がよいのではないか。

○　少子化が進行している中、今後の北海道の教育環境を考える時期に来ており、地域キャンパス校の在り方を検討する必要がある。

○　中学校卒業者数の減少により、高校の間口も減ってきているが、それが地域の活性化を阻害している状況もみられる。広域な北海道において、独自性や地域性、特長を持った学校づくりがキーワードとなっており、これからは、地域の中でどれだけ生き残れる形をつくっていけるのかが大事なところである。

【小規模校の取扱いについて】

○　地域において核になるのが、地元の高校を卒業した子どもたちである。卒業した子どもたちが、地元に残って町を支える人材を育成するのが地元にある小規模の職業高校の存在意義ではないか。

○　高校の統廃合が進み、郡部の高校は、限界に近い状況にある中、小規模校を希望する子どもが以前に比べて増えており、地域に通える学校を確保することが必要であると考えている。高校教育については、教育内容を一律に考えるのではなく、都市部と郡部の高校を、それぞれの特性に分けて考える必要がある。

【教職員について】

○　生徒にとっての最大の教育環境は教員自身であると言ってもよいので、教員の資質能力の向上のため、単なる情報伝達ではなく、現場で生かすことができる研修を実施することが必要である。また、地域に根ざし、地域に開かれ、地域に信頼される学校づくりを進め、学校運営を継続的に改善していくためには、管理職の転勤サイクルを見直す必要があるのではないか。

【入学者選抜の改善について】

○　少子化が進む中、高校の入学者選抜においては倍率が低く、ほぼ全入の状況である。そのため、目的意識を持たず、近くの高校に進学する子どもたちが増えているおり、学力の低下にも繋がっているのではないか。例えば、推薦入学も実施せず、全員に対して学力検査を課すなど、大胆な方策を考える時期に来ている。

○　生徒を育てるためには部活動も大切である。大きい規模だからこそ目指せるものはあるが、小さな学校、小さな部活動ならではの生徒の成長も確かに認められる。そこを担っていける教師の指導力もまた重要である。

【その他】

○　高校の進学率は98%を超えており、ほぼ義務教育と言える状況である。高校は小中学校と異なり、自らの意志で進学するものであるが、地元に高校がなくなったら、通学費など、保護者の負担は大きい。

　高校は、大学進学のための手段なのか、就職するための手段なのか、人格形成のためなのか、高校教育の目的を明確にする必要がある。

## ３　職業教育について

○　農業経営に興味・関心がある生徒が農業科に進学するするのが本来の趣旨であるが、現実としては、生徒が地元の高校に進学することが多い。職業高校には、様々な学科が設置されているが、生徒の進学希望と実際の進学においては、マッチングしていないのが現状である。また、普通高校を卒業した者と農業高校を卒業した者が同じ企業に就職している状況がみられる。職業高校の特性を生かすのであれば、企業のニーズを踏まえ、職業高校におけるキャリア教育をしっかりと打ち出すべきである。

○　道外から農業高校へ入学した生徒の中には、卒業後もその近隣市町村に就職する者もいることから、道内各自治体による定住・移住促進の取組も考慮しながら、今後の職業高校の在り方について検討する必要がある。

○　職業に関する知識や技術については、一定の間口をもった学校で専門的に学ぶことは必要である。一方で、地域の風土や気候など、その地域で学ぶということもあってもよい。郡部と都市部の高校の役割をわけて考える必要がある。

○　職業学科は、大学や地域の関係機関と一層連携を図る必要がある。また、北海道の現状や今後北海道が目指すものを踏まえ、道は教育委員会とともに、どのような職業人を育てるべきが考える必要がある。

○　農業高校においては、六次産業化を踏まえ、農業経営の視点から教育活動を推進する必要がある。

○　職業高校に進学する者の中には、目的意識を持って３年間しっかりと学ぶ生徒もいる、一方でそうでない生徒もいることから、中学校と高校の接続における指導の在り方が大切である。郡部においては、中学校と高校が、同じ地元の企業にインターンシップを行っていることが多く、取り組む内容も同じである。生徒の発達の段階を踏まえて、指導内容を検討する必要がある。また、地元において、就職先がないことは、高校における進路指導に影を落としている。

○　普通科を志望する中学生が多くなっている一方で、職業学科を志望するものが少なくなっている。これは、大学等への進学希望が増えて、就職を希望する生徒が減っていることとパラレルになっている。また、職業学科における進路先を見てみると、必ずしも専門性を生かした就職や進学をしていない傾向がみられる。これは、職業教育の存在意義が問われているのではないか。

　職業教育は北海道の未来を拓くため、大切であり、施設設備の充実を図るなどして、生徒が職業高校で学びたいと夢が持てるような高校を、普通高校ではなく、職業高校で実現するべきではないか。また、職業高校であっても、大学等に進学できるよう、高大連携の取組を推進する必要がある。

○　現在の工業高校の配置を見ると、郡部に住んでいる生徒が、工業高校に進学する場合は、近隣の都市にある工業高校に通学する必要があり、その場合は、通学費や下宿費など保護者の経済的な負担が生じることが考えられる。こうした負担を軽減するために、自宅外通学生に対して下宿代等の助成などを行うことが大切ではないか。

○　市町村では、生徒に対して様々な支援を行っているところもあるが、市町村の財政事情によって差があるため、北海道の問題として取り組んでいく必要がある。寮などを建設するよりも、高齢者だけの世帯を下宿として活用するなど、新たな発想が必要である。

○　小学校の保護者が高校を選択する際には、高校卒業後の進路を一番に考えている。職業学科を考える上では、卒業後に、身に付けた知識や技術を生かして、社会人として自立し生計を立てられることに繋げることが重要である。

○　北海道産業教育審議会の建議においては、７つの職業学科のうち、５つの学科で「食や観光に係る人材の育成」と記載されている。これほど、北海道の発展には食や観光は重要なことであると考えられる。そのため、職業学科については、生徒数の減少だけを理由に再編整備を進めない方がよいと考える。

○　道内では、高校の再編統合などに伴い、２つの学科を１つの学科に再編している例がみられるが、その際には、再編前と同じ学習内容が維持できるかが重要なポイントであると思う。

○　普通科の高校と職業高校が同じ地域にある場合、生徒数が減少により、２つの学校を１つの学校にすることで学校を維持する経費も抑えることができる。地域の意見を尊重すること大切であるが、地域産業の特性や全道の配置状況等を総合的に考えて再編整備をすることも必要である。

○　高校生の職業体験はとても意義ある取組であり、積極的に受け入れる企業がもっと評価される仕組みがあれば、職業体験を受け入れる企業も増えるのではないか。

○　異なる職業学科の生徒同士が地元のまちづくりについて考え、町の発展に取り組むと地域の活性化にも繋がる。

○　農業は、農業高校を卒業するだけでできるものではない。他の職業学科であれば、資格を取得することによって、次のステップに進むことができるが、農業高校に関しては、資格を取得することに結びついていない状況にあり、このことが、農業高校の欠員が多い理由と考える。また、総合学科は、２年生から自分の興味・関心や進路希望などにより、科目を選んで学習できる高校であり、普通科よりもこれから先は伸びる高校ではないかと思う。

○　職業学科において、生徒が学んだことが社会でどう生かされているか、それが北海道の農業を支える重要なポイントであり、詳細に分析を進める必要がある。

○　職業学科における高大連携の視点は重要である。高校での学びを最先端技術につなげることについて、大学が貢献できることもある。道教委はもっとアピールして、大学側も間口を広げていく必要もあるのではないか。